
スーベニア

こうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーベニア

【Nコード】

N0857Z

【作者名】

こつこ

【あらすじ】

わたしからあなたへ
あなたからわたしへ
わたしからわたしへ
あなたからあなたへ

飛び出す絵本

空の上には痛みなんて無いのだと思っていた

土の中には悲しみなんて無いのだと思っていた

犬の形をしたキャラメルと

キャラメル色をした犬と

私はどちらを踏んだのだっけ

遠いあの日

喜びを履いた心は踊り出し

そのまま何処かへ行ってしまったのだ

黄色いハンカチを持って幸福を捨てに行く途中
絶望を知り希望を知った

ハンカチを捨てて

それからもう一度拾って帰った

コウノトリが運んできたのは新しい命ではなく
息絶えたあの日の私だった

私は土に悲しみを埋め
そして空に痛みを放ったのだった

溜め込んでいたキャンディの包み紙をぶわりと撒き散らして
私はまた
新しい喜びを産む

今度は一緒に
踊れるように

%

縮こまる世界の
窮屈さに順応していたよ
いつの間にか

拡大したら貴方の顔
余計にぼやけてしまつて

頭の中画質悪くて
使いづらい

幸福は
怖いもので

ああ
だとしたら

怖いものは
幸福で

ろくに機能しないのに
まるで計算したみたいにサラサラ零れていくから

くだらない事ばかり詰まった体は
風船一つで飛べそうで

忘れてしまった記憶はきっと
こんな夜の日の
出来事なんだろう

広がらない空間の
曖昧さに執着していたよ
長い間ね

もう少し縮めてみたら
貴方の顔
思い出せそうなんだけど
小さすぎて
見えないじゃない

磨り減ってく
口数の少なさを

今日は笑って
許してよ

シフト

ノイズだけで構成された音楽を耳に詰め込み
モノローグばかり綴った物語を片手に電車に揺られる

助走している内に終わってしまった競技と
握り締められたまま投げられる事のなかったタオル

空までは決して届かない樹木と
ぶら下がったまま使われる事のなかったロープ

幾つも点在する
終着点

温められる事で
孵化する命

土の中で瞬間を待つ命

ジャンクフードで形成された体はネクタイを拒む

スーパーで卵を買っては温め
温めては腐らない内に食べる

食卓にはヘビーローテーションされる卵料理と『いただきます』

その影で長い間順番を待つ『ごちそうさま』

足跡のつかないアスファルトに君を探して
出遅れた足は一週間前をひた走る

背表紙を突き抜けて
終着駅で始発を待つ

懐古の蘭

めつきり大人しくなった携帯電話が

「接続できません」

「接続できません」

ばかりを繰り返すようになった

辺りは近未来的な風貌で

うんと高い建物が空を近くみせている

とまっていたのだ

携帯電話と

それから私の世界が

その外の世界は着々と動き

機械の犬は分解され、また生まれ変わっていた

とりあえず三百二十円を持って

コンビニ（らしきもの）で煙草を一箱買おうとしたら

「足りません千円です」とか言われた

どこからか

サイレンにも似た

賛美歌にも似た

断末魔にも似た、

やっぱりサイレンに似た音が

こちらに近づいてくる

何処かへ逃げようとしたけれど

名前のついてない土地などもう

何処にもないのだった

私はもうすぐ

撃ち殺されるだろう

一日

隣のお爺さんの神々しい頭を

朝日に見立てる事から私の朝は始まる

恋人は、言うことをきかない犬の散歩をするような足取りで
昨日の空を見にいつてしまった

追いかける事もせず

時計を気にしながら化粧をする

私は間違っていないだろう？

鏡に問うてみるが返事はない

間違っではないが正しくもないのかもしれない

本当は追いかけたいのだと足が駄々をこね始める前に

あの電車に乗らなければ

いつまでも慣れないパンプスに振り回される私はさぞかし滑稽にち
がいない

上司の危うい毛髪が

後輩の甲高い声が

社員食堂の月見うどんが

私の周りを旋回し

鴉が頭上を三度舞ったところで日が暮れる

脅えるものか

脅えるものか

家に帰ると、いつの間にか戻ってきていた恋人が
タオルケットをミルクに浸していた

そして

「さあ眠ろう」と誘う

ぐしゃぐしゃに丸めたタオルケットを抱え込んで今日を保つ

明日のために

昨日を蔑ろにしないために

開放した窓からざっざつと足音が響く

向かいの山下さんがウォーキングに出掛ける時間だ

山下さんは履き潰したスニーカーの靴紐だけを時々かえる

それを人生に見立てる事で

私の一日は終わっていく

たね

彼が種になったので
土をうんと柔らかくして庭に植えた

やがて芽が出てから

何十年もかけて

それが木になり

彼が生った時にはもう

私はしわしわのお婆さんだった

彼がぼとりと地に落ちた

今度は私が種になるのだ

そして

熟した頃にはまた、

レモンで色止めされた世界で

何かを違えたまま

何十年も

繰り返す

繰り返す

繰り返す

いつかどちらかが
植えることをやめてしまっただろうか
それとも

鳥に託すだろうか
海に投げるだろうか

糖度の高い果実のようなあなたを
私はいつまでかじらずにいられるのだろうか

きえぎえ

こすれて消えてしまいそうだった君を
ボールペンでなぞって安心したのも束の間
君は泣き止むどころかさらに酷く泣き出した

何度でも手間でも
その都度鉛筆でなぞって欲しかったのだと言った

*

いなくなりたい
ねむりつづけたい
たいたいたい、と
つよくつよくねんじ

よけいに
いのちのほのおを
ごうごう
もやしたりしていました

はたと
きづいたしゅんかん
ぜんしんの

ちからがぬけて
おもわず
わらってしまいました

*

書いては消し
書いては消し
手紙を書き直してばかりいたら
消しても消えなくなつて
文字の跡がうつすらと残るようになった

使いものにならなくなった便箋の上
混ざり混ざつた文字達は知らない言語になつて

伝わらないまま
静かに燃えて

暗黙の下で

帰る場所も無いので

一日の大半は電車に揺られています

景色が引き伸ばされるので

座席には後ろ向きに座るのが好きです

スポットライトは見当たらないので

行きつけの寂れた街灯の下へ向かいます

夜に紛れてちらほらと

今日も順番待ちをしている人達がいる

皆思い思いに“得意なもの”を披露していきます

順番がくると僕はひしゃげたビニール傘を片手に
いつものチャップリンを演じました

空気はしんと冷たく

無言の喝采だけが響き渡ります

此処は僕の知りうるどの場所よりも
貴重な場所なのだと思います

朝日が昇り始めるので

人々はそれぞれの日常へと溶け込んでいきます

そして僕はまた

電車に揺られるのです

マッチ棒が必要だ

夜

幼いジョンとブライアンは
家出の計画を練っている

夜

猫達は集会を開き
暖かく過ごせる場所は何処かと
情報交換に余念がない

三日前に片割れを亡くしたブーツは
その半身で一人冬を持て余して泣いていた

彼の部屋では
手のひらみたいな葉っぱが
むくむくと育っている

私は気化していく悲しみを
鼻から吸い込んでいる

二人、一つのカップにおさまってゆらぐ
隔てているのは皮膚だけではないと思い知るために

夜は彼を小さくみせる
夜は私を素直にさせる
話す事など何もないのだ

朝

少年達は少し大人のふりをした

朝

猫達は賢く生き延びている

ブーツは冬眠し始めていて
火照りすぎたケトルが
焦れたように鳴きだし沈黙を破る

私は泡になって
コーヒーに浮かんだ

それはほんの少しだけ
彼の朝を彩ったようだった

無題

蟻は目次の横でぺしゃりと潰れ本の一部になりたがり
するりと舞い込んだ落ち葉は壁に張り付き飾られたがった
(私は、私は、)

野良猫は虎の背に焦がれ絨毯になりたがり
毛布はどうにもくるまれたがった
(私は、私は、)

踊りながら
私は一つ一つに題名をつけて回った
時には悲観しながら
(嗚呼嗚呼
きつと君はとても素敵なものを見たんだね)

手のひらをじつと見つめていると
頭と体とが離れてゆく
どこか遠い所
あるいはうんと近いのかもしれない

何にもなれなかった

かと言って何にでもなれるわけでもなかった
(私は私につける題名が無い)

バラバラと雨が降り出す

バラバラとジグソーパズルになる

ピカピカに浴槽を磨き上げた後のような感覚

(そして気付く

私だけが汚れている事と石鹸を買い忘れた事に)

バラバラと雨に混ざって私が消えたのか
バラバラと私に混ざって雨が消えたのか
それは最後までわからなかった

都会の隈さん

（羊が1匹羊が2匹数えていたら、3匹目の羊が転けて4、5、6と次々転けて、もかもこ重なり雲になって帰ってこなくなった

それきり羊は数えていない）

ある日都会の片隅で隈さんに出会いました

隈さんはお逃げなさいと言ったりお待ちなさいと言ったり
天の邪鬼な素振りを見せて翻弄した挙げ句、何だかんだで結局は家までついてきました

隈さんは少し躊躇しながら

これ落としましたよ、と昔僕が捨てた筈のボールペンを差し出したのです

ボールペンは出せたらしく万年筆になっていて、何とも迷惑そうな顔をしています

とりあえず二人を家の中へ招き入れはしたもののお茶菓子が無かった事に気付き、僕はお茶に添えて小話を一つ披露しました

しかしすぐさま万年筆に酷評されてしまい、僕はすっかり打ちひしがれてしまったのだけれど

飴玉をくれたのであつという間に忘れてしまいました

万年筆には帰る処があるらしく、お茶を一口飲んだ後そそくさと帰って行きました

隈さんには帰る処がないらしく、二杯目のお茶を飲み終えるといつの間にか僕の目の下に住み着いてしまったのでした

外ではいつも圧力をかけられている僕は、家に帰ると豚肉に圧力をかけるのが日課です

すると美味しい角煮が出来上がるのです
(仄かに革命の匂いを放ちながら)

大抵の豚はくたくたになって「もうどうにでもしてくれ」と言うのだけれど

時折「こんなものには屈しないぞ」と言うものもいるので

そんな時僕の胸は少し軋んだりするのでした

窓の外では雲がもくもくと集まりだし、雨を降らせる準備をしています

ところが雨が降り出すかと思いきや、あちらこちらの空からは雲が羊になってぼろぼろと落ちてきていたのです

（僕は腦みそを広げると羊を拾い集める為に旅立って行った、隈さんと共に

それきり僕は帰ってこない）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0857z/>

スーベニア

2011年12月3日06時58分発行